

---

# 独裁者(予定)と、とってもカオスな野郎共

オズワルト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

独裁者（予定）と、とつてもカオスな野郎共

### 【Nコード】

N0544BA

### 【作者名】

オズワルト

### 【あらすじ】

俺は藤崎正太郎。絶賛独り暮らし中の高校二年生だ。独り暮らし中ってこと除けば、俺は比較的平均な、男子高校生の日常を歩んでいたと思う。

自称未来人のアイツが俺の家に来て来るまでは。

俺が将来独裁者になるだつて？歴史の決定事項？特異点？知らねーよ、なんだよそれ。

そして次から次へとやってくる変人奇人超人ども。

チクショウ！！なんでもありなドタバタカオス系アクション活劇、

開幕だ！！

## Case 1 未来人、不法侵入する

俺は藤崎正太郎。高校二年生。親元はなれて、一人暮らし中。父さんと母さんは海外で仕事をしている。中学生の頃、俺もそれについていくはずだったが、日本に残りたかった俺は、頼み込んで日本で一人暮らしをすることを許可してもらった。寛大な両親で本当によかった。

俺が今住んでいるのは家族三人で暮らしていた頃から使っている3LDKのマンションだ。一人で暮らすにはちよつと広すぎて、たまに寂しくなる。

生活費は毎月一度、銀行口座に振り込まれる。それ以上のものはない。小遣いが欲しければ、バイトをしろってことだ。

元から放し飼いみたいな感じで育てられた俺は、幸運にも道にも誤らずにやってこれた。公立中学で楽しく馬鹿らしく過ごし、高校で勉強に励みつつもバイトや遊び奔走し、自分で言うのもなんだが、なかなかいい毎日を送ってきた。

昨日までは。

「ねえ、君が藤崎正太郎？」

昨日の午後八時。そいつは、突如ベランダに不法侵入をかましてきやがった。

「なんだお前。どっから入ってきた？」

その女は、見るからにおかしかった。

まず、服装。街中でお目にかかったことないような、露出の無駄に多い格好。ビキニを着て、それにブーツを履いて、ガウンを羽織る。それだけ。スタイルもそこそこにいいから、目のやり場に困るとても、まともな奴がするような服装じゃなかった。

まあ、いつちゃんんだけど、可愛かった。目が大きくて髪は肩の辺りまで掛かっている。唇は……いや、そんな事を考えている場合じゃねえ。そもそもだ。

「変態か？」

「ちがうよ。私はね、未来人なんだ」

俺の気のせいだったみたいだ。

こいつはただの変態じゃない。電波属性まで持っている、ハイレベルすぎる変態だ。

「よし、わかった」

「わかってくれた？ よかったあ。正太郎が物分りのいい人で」

「それじゃあな。風邪引くなよ」

俺は室内に入り、ガラス戸を閉めて鍵をかけた。

「え、ちよつと、しょうたるー！」

関わらない方がよさそうな人種だという事は一瞬で理解できた。不法進入で露出狂でおまけに電波。永遠に接点なんて欲しくなかった。

俺が買ったばかりのロボット格闘ゲームの続きでもやろうかと、テレビの前に戻った。窓の外から声がするが、気にしない事にした。ベランダに侵入できたんだ。きつと、帰る事だっでできるだろう。

俺が床においていたコントローラーを手に取るうとしたとき。

「ねえ、無視しないでよ！」

などという声とともに、床から腕が生えてきて、コントローラーを奪っていった。

「はぁ？」

信じられな過ぎて、対して驚いてもいなさそうな声を俺は発して

いた。

そう、生えてきた。五本の指、手の平、手首、腕、肩、頭と胴体。その他もろもろといった順番で、電波女が床から生えてきたのだ。俺のコントローラーを片手に持って。

「ひどくない？ 話も聞かないで乙女を外に締め出すなんて」

乙女？ 何言ってるんだこいつ。もはや人間ですらねえだろ。

「無駄だよ、正太郎。私にはこれがあるから」

電波は左手に持っていたコンパクトみたいなものを俺に向けてきた。

「超高性能万能ツール携帯版、『できる君』。これさえあれば、できないことはないんだから」

女が誇らしげに胸を張る。

「馬鹿が、お前は」

「馬鹿じゃないよ！こうなったらできる君で……」

女がコンパクトを開き、なにやらいじりだした。

次の瞬間。

「え？」

俺は、雲の上にいた。夜空が目の前にある。月がでかい。満点の星空が見える。

そして、重力に負けて、身体が落下を始めた。

「うああああああああああああああああ……！！！！」

滅茶苦茶に叫んだ。身体が落ちてく。何も無い。あそこに光って見えるのって飛行機か。

え、マジでここって空なのか！？

「どう、これで信じた？」

横をみやると、さっきの電波が俺の隣で共に自由落下していた。

「あ、ちなみに気圧の差はできる君でなんとかしといたから」

「お前の仕業かよ！」

「もちろん！」

女がふぶん、と鼻をならす。正直、答える選択肢は一つしかなか

った。

「ああ、信じる、信じてやる！だからこれ、なんとかしろよ！」  
このままだと死ぬ！「信じる」って言わないと絶対に死ぬ！

「うん。わかった」

再びコンパクトが操作される。数秒後。

「うわっ！」

俺は自宅の床に激突した。

「いつて……」

尻を強打したが、それだけだった。痛いだけだ。骨が折れたりなんかはしていない。

とりあえず、無事に生きて家に戻ってきたみたいだ。

「ね、すごいでしょ。できる君って」

できる君ってなんだよ。ネーミングセンスが意味不明すぎる。

いや、それ以前に、この電波ゆんゆんの不法侵入女はなんなんだ？

「……お前は誰なんだよ」

「私はレイラ。未来人だよ」

これが全ての始まりであり、俺の青春の終わりだった。

## Case 2 独裁者、宣告される

そんでもって、今日。

その未来人の言う話では、俺は将来独裁者になる、らしい。

「本当はそんな事止めさせたいんだけどさ、正太郎が独裁者になるのは歴史の決定事項なんだよね」

三合炊いた飯をそいつは一人でたいらげやがった。どんな胃袋してんだ。

相変わらず、服装は露出の高いビキニとガウン。何を考えてるのかわからない。俺の服はきついらしい。主に胸元が。あと、ズボンにはきたくないらしい。

うっかり気を抜くと、胸元に目が行ってしまいそうだ。踏ん張れ、俺の理性。

「決定事項って、どういうことだ」

「なんていうのかな、歴史の必然、みたいな。どんなに未来からタイムマシンで過去に言って歴史を操作しようとしても、かえられないことがあるんだよね」

未来人 レイラは「できる君」とやらを操作した。

スイッチも入れてないのに、勝手にテレビが起動した。画面に映っているのは歴史の年表。社会の教科書とかに乗っているやつだ。

「他にもそういう人を上げるとしたら、正太郎以外だったら 例えは、ヒトラー。彼の行動は全て、歴史の必然だった」

ヒトラーってのがどんな人間か、具体的な人格はわからないが、やった事は知っている。

「アメリカ大統領だったケネディとかもそうだよ。ケネディって暗殺されたでしょ？ でも、その時の銃弾の軌道はおかしな方向に捻じ曲がってた」

「ああ、それは俺もどっかで聞いたことあるな。何度も弾丸が曲が



「つたとしか言いようのない命中の仕方だったってやつだよな……それも必然とか言うつもりなのか？」

「もちろん。今の世界に残っているあの弾丸の軌道は、タイムマシンである時代に行った人間が色んなことをやって、弾丸が到達しないようにと妨害した結果なんだよね。超能力とかで。結果は失敗。何をやってても弾丸はケネディの頭部をぶち抜いて」

「おい、待て。超能力者ってなんだ」

「この女、さらっととんでもない事を言いやがったぞ。」

「未来じゃ普通なんだよ。超能力者」

「もう未来って言えばなんでもありだな。」

「で、正太郎が独裁者になるのはそれと同じように決定事項なんだよね。特異点、だったかな。だったら、悪い独裁者じゃなくて良い独裁者になってもらおうっていう、結論に至ったんだ」

「どこから突っ込んだらいいのかわからん」

「ホントの事だってば」

「そんな事があってたまるか」

「俺は席を立ち、通学鞆を手を取った。」

「どこ行くの？」

「学校だよ、学校。俺はな、独裁者なんか絶対にならないし、歴史の必然なんてのも関係ないし、もしも未来人が存在してたとして、そんなのも俺は一ミクロンたりとも関わりたくないんだよ。俺はな、高校生なんだ。朝日が昇ったら飯を食って学校に言っつて、クラスメイトたちと面白おかしく毎日を過ごし、先生には適度に媚売って内申点もらって、放課後はバイトの先輩の自慢を聞きつつも愛想笑いを浮かべ、店長の理不尽な要望を聞きつつも心の奥底では舌打ちして、夜になったらドラマを見てニュースを見てNHKのドキュメンタリー見て泣いて、そんでメシ食って風呂入って寝るんだ。俺は忙しいんだ。青春を謳歌しなくちゃいけないんだよ。お前みたいな気が違ってるような奴と関わってる暇なんてな、俺にはこれっぽっちも」

「別にいいじゃん、そんなの」

レイラが寄ってくる。あからさまに腕で胸元を寄せ上げながら。

「ねえ……そんなことより、私といいこと、しない？」

上目遣いで俺を見てくる。さっきまでは全く見せなかった、実も蓋もない言い方をするなら、滅茶苦茶にエロイ表情と声で言い寄ってくる。色々とヤバイ。主に俺が。

レイラは立派にむちむちしているくせに、要所要所はしつかり引き締まっていい。身長は低い。百六十センチもないだろう。俺は百七十センチ。常に俺を見上げる形になる。その顔はどちらかと言えば童顔で、なんていうか、いろいろとミスマッチが……俺のストライクゾーンが狙い打ちに……。

「うるせえ、ふざけんのも大概にしゃがれ！」

俺は感情をごまかす為に怒鳴り散らし、半ば走るように家を出て、鍵を閉めた。

くそ、あの野郎、遊んでやがる。絶対にそうだ。だってそうにきまつてる。あの表情、エロイだけじゃなくて、楽しんでいるみたいだった。

つつか、昨日から一体なんなんだ？

悪い夢でも見てるとしか思えない。実際、全部幻覚なのかもしれない。最近、食生活が乱れつつあるのが原因だろうか。いや、そうであってほしい。今日はちゃんと野菜を食べよう。ビタミンを取ろう。牛乳を飲んでカルシウムも取ろう。魚も食おう。インスタント食品は控えよう。一刻も早くこんな妄想からおさらばしたい。

エレベーターに乗って、一階へのボタンを押す。このマンションは十三階建てだ。俺の住んでいる部屋は八階。そこそこに景色がいから、俺は気に入っている。

「はあ……ありえねえ」

「そうそう。ありえないよね。まさか乗ってくれないなんて」

目の前に、ドアから頭だけ生えているレイラがいた。

「……………」

「あそこはさあ、もう少し気の利いた切り返しをすべきだと思っの。怒鳴り散らして逃げるなんてサイテー。女の子のこと何にもわかってないでしょ？ 私だって、ちょっと恥ずかしかつたんだから」

擬音を使うんだったら、よきによきか。とりあえず、レイラが這うようにして、エレベーターのドアから生えてくる。片手には例のコンパクト。もう、好きにしるって感じた。

「ねえ、聞いてんの？」

「え、あーはいはい、聞いてますよ」

「冷たすぎでしょ。私、まだふいふていーんの乙女なのに」

こいつ、下手すりゃ中三？ さすが未来の中学生はモノが違う…

…いや、そこに驚いている場合じゃねえ。

「ていうかさ、何なお前。ついて来る気なの？」

「あたりまえじゃん」

なんでこいつは、一々自身ありげに話すのだろう。しかも、俺は年上なんだろう？ もう少し、なんとというか、尊敬とは言わないまでも、少しくらいの遠慮はあってもいいんじゃないだろうか。

それに、ついて来られるのは色々と厄介なんだ。

「なんで？ 嫌なの？」

「……格好が目立つんだよ」

ビキニの水着にガウンを羽織っているだけ。そんなのが街中を歩いていたら、視線を釘付けにするのは考えなくてもわかる。一緒にいれば俺まで変人の仲間入りだ。

まあ、その辺は建前であって。ぶっちゃけてしまえば、俺はこいつについてきて欲しくなかった。俺の楽しい楽しい高校生活を壊して欲しくなかった。

「そうかなあ。未来だったら普通だけどね」

「馬鹿にするのもいい加減にしるって」

「嘘じゃないって。現代いまの人間が内気すぎるんだよ」

誰かこいつをどうにかしてくれ。

そんなこんな話している間に、エレベーターは一階へと到着した。

自動的にドアが開く。

するとそこには。

「お前が藤崎正太郎だな」

俺の目の前には、サブマシンガンを構える黒服の男がいた。

### Case 3 黒服、発砲する

「やばい！死ぬ！殺される！」

「逃げるな」

「そりゃ、そんなもんぶつ放してきたら誰だって逃げるだろ！死んでしまおうわ！」

「そのためにこうしている」

黒服の男がサブマシンガンを連射しながら追いかけてくる。街中に銃声が木霊する。

なんなんだよこれは。おかしいだろこんなの！

いたるところから悲鳴が聞こえてくる。そりゃそうだ。街中でサブマシンガンぶつ放しているやつがいたら、誰だって悲鳴を上げる。俺はもう泣きそうだ。

弾丸が俺の頭の真横を通り過ぎた。あと十センチ近ければ、俺は死んでいた。

「止まれ。楽に殺してやる」

黒服が静かに言い放った。

「死んでたまるかよ！つうか誰だよ、お前は！」

「お前に教える義理はない。とりあえず死ぬ。まずはそれからだ」

「死んだらそれで終わりだろうが！」

叫びながら逃走。立ち向かおう何て気はわからない。でてくるわけがない。

男は無表情で俺を追ってくる。滅茶苦茶怖い。ありえねえ。なんだこれ、どうして朝っぱらから銃で狙われなきゃいけないんだ！？青信号が点滅しかけている横断歩道を渡り、人ごみを避けながら走り回り、裏路地に逃げ込んで、橋を渡る。

それでも、男は追ってくる。

「あ、いたいた」

レイラが滑空していた。俺の真横を併走する。

「とんでもない事になつてるねえ」

「あなたにとつては人事ですから？ そんな落ち着いていられるんですよねえ！？」

なんで俺があんな危ない男に命を狙われなきゃいけないんだ。

あの時、エレベーターの中で、俺の名前を呼んだかと思つたら、いきなりサブマシンガンを撃つてきた。殺意しか感じなかったからマシンガンをぶっぱなされる気がして咄嗟にしゃがんでいたお陰で避けた。もう少しで死ぬところだった。すげえな、俺。ちゃっかり、あの未来人はバリアみたいなのを張っていた。

そのまま立ちふさがる男の足元の隙間をすり抜けて逃げた……と思つたら、なんと黒服がサブマシンガンを片手に追ってくるではないですか。

マジありえん。

「口調かわつてるよー」

あははー、とレイラが笑う。

くそ、やっぱり他人事かよ。ふざけるよ。

そうこうして逃げている内に、来たことのない場所に来てしまった。いりくねった道を滅茶苦茶ににげる。

「死ね」

男が引き金を引いた。鉛の雨が俺に向かってくる。

「どあつ！」

「あぶないなあ」

俺は大きく左に跳んでそれを避けた。未来人は当然のように、自分にだけバリアを張っている。

「おい、俺も守れよ！」

「大丈夫だよ。正太郎は死なないようにできているから」

「はあ！？人は撃たれたら死ぬつての！」

もう駄目だ。こいつはアテにならない。

狭い道を走つて逃げる。だがそれを続けている内に、壁が俺の前に立ちふさがった。

「行き止まり……！？」

「逃げてたら当たらないだろう」

そいつは不敵な笑みを浮かべている。慎重は俺と同じくらいか。髪の毛は無造作に伸ばされている。前髪で目がわずかに隠れていた。筋肉質な身体だが、太すぎるわけではない。いわゆる、細マッチョというやつだ。目は獲物を狙う獣のようにギラついていた。もちろん、標的は俺だ。

「どうして俺を殺そうとするんだ」

俺は聞いてみたんだ。理由をわからないで殺されるなんて納得いかないから。

けど、黒服で細身のそいつは、全く俺の言葉なんて聞いちゃいなかった。

「ど、どうして君が……っ！」

目を見開き、宙を浮くレイラを見ていた。シカトですか。ああ、そうですか。

「あ、君、もしかしてソースケ？」

しかも知り合いなんですか。また電波ですか。

「へー。すごい変わったね。全然気がつかなかったよ。大人っぽくなったっていうか、実際大人になってるって言うか……あれ、もしかして、私がタイムスリップした数年後から来たの？」

「あ、ああ。まあな」

しかもこの電波未来人と話があってるよ。こいつも同類なのかよ。「なんで正太郎の命を狙うの？ まあ、多分死なないと思うけれど……それでもさ、手の一本や二本はなくなっちゃうんだから、止めたほうがいいよ」

物騒なことを言う。つーか、そう思うんだったら、なんで守ってくれないんだ。この女は。

「……そうしたかったから、だな」

「おい、そんな理由で殺されたらたまらねえぞ」

「貴様は黙っている」

ソースケと呼ばれた男は俺のこめかみに銃口を突きつけてきた。  
「……嘘です。ごめんなさい」

俺には発言権はないって事なんですか？ 酷すぎやしませんか？  
もう嫌だ。なんなんだよ、この状況。

「土下座しろ」

男は無表情で告げる。

「は？ なんでそんなことしなくちゃなら  
撃つ」

「やります。やらせてください」

「まあまあ。ソースケもその辺にしてさあ」

「君がそう言うなら」

レイラの言葉に、ソースケという男は素直に応じた。銃口が外される。

ほう、なるほど。この女の言う事だけは聞くのか。俺の言う事はシカトもしくは否定されるだけなのか。例え電波が相手だとしても、初対面でそれは泣くぞ？ 思春期の男子は繊細なんだ。もっとデリケートに扱ってくれよ。

「それにしても、なんでソースケはこの時代に来たの？」

そんなことよりなんで俺を狙うのかだろ。まさかさっきの理由で納得したわけじゃないよな。

と、言おうとしたが、止めた。あまりいい結果を招かない気がしたから。

「いや……その……」

ソースケとやらは口をもごもごと動かしている。なんだ、こいつ。恥ずかしかがってるのか？

頬を赤くして俯いて ああ、なるほど。

「まさかこの女が好」

すさまじい反応速度で俺の校内に銃口がぶち込まれた。もちろん、やったのは黒服の男だ。

「それ以上言ったら殺す」



「ふうひいふあふえん……」

「わかればいい」

くそつたれ、大体わかったぞ。

不本意ながらも、こいつらが未来人だと言うことを真実だとするならば。

レイラは俺を「良い独裁者」にするために未来からやってきた。

このソースケという迷惑野郎はレイラのが好きだ。で、追って来た。一緒に未来に帰りたいとでも思ったのか、この男の悲願を達成する為に俺の存在が邪魔だと判断したのか、どちらにせよ俺が死んでるほうがこいつにとって都合がよかった。だから殺そうとした。え、何それ。そんな理由で殺そうとしてくるとか、こいつ、やべえ。ある意味、ストーカーの亜種みたいなもんだらうか。

「うーん、よくわからないけど、仲直りしてみたいでよかったよ」  
なにやらレイラがほざいているが、断じて仲直りなんてしていない。

まあいい。ここで余計な事を言うと、またサブマシンガンを突きつけられそう。

「そうだ。正太郎、学校間に合うの？」

携帯で時間を確認した。八時十分だった。ホームルームが始まるのは八時半。あと二十分だ。

「あー、微妙。結構走ってきちまったし」

「そっか。じゃあ近くまで送ってあげるよ」

え、ちよつと待て。それは嫌だ。

この女はそこそこに人の目をひきつけるくらいの容姿は持っているし、それ以前に、服装が目立つ。おまけに、物騒なものを片手に握っている黒服までいる。

もしもその二人と一緒に歩いているのを目撃されれば、俺ももれなく変人奇人の仲間入りを果たしてしまう。そうでなくても、少なくともよろしくないというわさの一つや二つ、立つだろう。そんなの嫌だ、絶対に嫌だ。

「いって。なんか悪いし」

「遠慮しないでよ。将来独裁者になるんだから、これくらいなんてことないって」

「ならねえよ！ともかく、俺は歩いていくから……」

歩き出そうと踵を返した瞬間、後頭部にひんやりとした違和感を感じた。

「人の好意は素直に受けるものだと思わないか？」

「ええ、そうですね……僕もそう思うんで、その物騒なものを突きつけないでください」

俺に選択権はないのか。もう色々諦めるしかないみたいだ。

「それじゃ、行くよ。ついてきてね」

行き止まりの壁に向かい、レイラはコンパクトを翳した。

僅かな米粒みたいな穴が壁に生まれる。それは見る見るうちに広がっていき、一人人が通れるくらいの、大きな輪となった。その向こう側は何処か薄暗い所に繋がっていた。

レイラとソースケがその輪を通り、向こう側へと渡っていく。

ああ、もう好きにしろよ。未来技術ってすげえな。俺の理解を超えているよ。これは何だ？ ワープか？ 某ネコ型ロボット御用達のドアか？

「ほら、正太郎も早くおいでよ」

レイラが手を差し出してくる。とびっきりの笑顔で。

「あ、ああ」

俺も健全な男子高校生であって、しかも悔しい事にレイラは俺のど真ん中ストライクゾーンなわけで、なんというかその、ちょっとドキドキしてしまう。

でも、差し出されたその手を握り返しはしなかった。

理由は一つ。黒服の男、ソースケが物凄い目つきで俺を睨んでいたからだ。

その手を握ったら殺す。わかっているな？

声には出していなかったが、そう聞こえた。

「どうかしたの？」

「いや、なんでも」

輪をくぐり、薄暗い場所に出る。直後、俺達の通った輪は消えていった。

辺りを見回す。誇りっぽい場所だった。汗臭くもある。様々な道具の影が見える。

「ここは……体育倉庫か？」

「あたり。大正解だよ」

レイラが倉庫の扉へ手をかけた。

「おい、ちよつとまで」

扉を開ける前に、俺は声をかけた。

「その格好は目立つって言ったろ。やめとけよ」

ビキニにガウンの中学三年生が校舎をうろついたら、騒ぎになる事は間違いない。

「うーん、そんな大変な事にはならないと思うけど……」

「問題ないだろう」

未来人（自称）二名は俺の言う事が納得でないようだ。

面倒な事になるんだよ。お前らは感覚が狂ってるからわかんないだろうけどな。

「まー、わかつたよ」

レイラの身体をいくつもの繊維が包み込んだ。それは学校のそれも、俺の学校の 女子生徒の制服となる。

その光景を目の当たりにして、全く動じない俺がいた。なんか、感覚が麻痺しかけてるみたいだ。

「言っとくけど、お前らついてくんなよ」

「え、無理だよ」

「何を言っている？」

もう、こいつは二人には何を言っても無意味なんじゃないかって思えてくる。



## Case 4 同級生、雑談する

昨日の夜からずっと散々な目にあっていたせいか、授業に安らぎを感じていた。

「えー、ここにx=7を代入して……」

いつもは退屈で退屈で仕方がない数学教師の言葉でさえ、心地よく思えてくる。ぬくぬくとした教室の温度が眠気を誘い、まどろみが俺のまぶたを重くする。

黒板には数式がびっしりと埋められていた。教師の手には白いチョークと教科書が握られている。

机に突っ伏していたり校庭を見て授業を聞いていないのは俺を含めて数名だ。大半の生徒は真面目に授業を聞いてノートを取っている。この学校は進学校だし、当然といえば当然だ。

俺だって、いつもはちゃんとノートを取っているし、しっかりと授業を聞いている。

だけど、今日はそんな気になれなかった。この平和を全力でかみ締めたかった。

ちなみに、あの未来人達は「社会見学」とか言ってどこかに行っている。二時間が終わるくらいまでは「できる君」という便利ツールによって透明人間となって俺の真横にいた。で、それに飽きた気まぐれな奴らだ。レイラは嬉々として街に繰出し、ソースケ若干口元を緩ませてついていた。

というか、透明人間になれるんだったら最初からそうしてろよ。今は五時間目。まだあいつらは帰ってこない。俺としてはそっちの方がいい。むしろ、このまま一生帰ってきて欲しくない。あの変人たちは気のせいだったんだと思いたい。

「ふああ……」

欠伸が出た。なんかこう、落ち着く。こんなにも普通の生活がい

いものだとはおもわなかった。

「眠いの？」

真後ろから声をかけられた。まあな、と言いながら後ろを振り向く。

そこにはショートカットかつボーイッシュな女子生徒がいた。名前は月島ゆかり。小さい頃からの腐れ縁だ。聞いた話では遠い親戚なんだそうで、家族ぐるみでの交流が昔からあった。

ゆかりの家は俺の家から近い。中学生の頃くらいまではよくお互いの家に遊びに行っていた。

頻度は激減したが、今でも俺はたまに月島家で夕飯をご馳走してもらっている。

ゆかりの親父さんは道場の師範をやっている。一部の間では有名なスパルタ道場だ。年中門下生不足に苦しんでいるらしい。なんでも、入門しても二週間も持たないとか。

ちなみに、ゆかりはその道場でみっちり鍛えられている。情けない話だが、もしも俺とゆかりが喧嘩をしたら確実に負けるだろう。

一度、親父さんとゆかりの組み手を見たが、あれはもう人間の動きではなかった。

「珍しいね。シヨウが授業中に欠伸をするなんて」

ゆかりは俺のことをシヨウと呼ぶ。正太郎のシヨウだ。そこまでいいあだ名だとは思わないが、ゆかりは気に入っているみたいだ。

若干恥ずかしいが、こいつにシヨウと呼ぶのを止めさせるのは無理な気がする。

「色々あったからな」

本当に色々あった。だからこそ、今は頭の中を空っぽにして平和を全身で感じていたい。

「ほうほう。色々ねえ。とても素敵な響じゃないですか。俺としてはとても気になるわけなんですけど、そこどころ、詳しく説明してもらえませんかねえ」

ぐへへへ、と気味の悪い笑い方をしながら俺に喋りかけてきたの

は、隣の席に座る天城<sup>あまぎがい</sup>効だ。

ゆかりと違って、こいつとは高校からの付き合いだ。悪い奴じゃない。ちよつと変態が行き過ぎていてだけで、基本的には友達思いの熱血漢。誰かが困っていたら、すぐにすつ飛んでいくタイプ。今時珍しい男だ。

一言で言うなら、馬鹿。天城は勢いで行動している。この間なんか、去年同じクラスだったメガネの同級生（名前は確か佐藤。最近、イメチェンしてメガネをやめてコンタクトにしていた）がカツアゲヤされている現場を目撃し、全く何も考えずヤンキーに喧嘩を売ってしまったことがある。

天城はその辺のチンピラよりは腕が立つ。お礼参りといわれて十何人もの不良たちに襲われた時ですら、武器を持ったチンピラに取り囲まれても、天城は無事だった。俺はその現場にいなかったから、詳しい事はわからない。だが、天城は密かに「化け物」と呼ばれている。どうしてそんなあだ名がついたかは、考えるまでもない。

そうは言っても、俺やクラスの面子がこいつに殴られてケガを負わされた、なんて事は一度もない。

普段の天城は凶暴というよりも、女好きにしか見えない。女なら誰でもいい、というわけではない。天城なりの譲れない拘りがあるみたいだ。両親が出会ってすぐに結婚したのとなにか関係あるらしいが、詳しい話は聞いたことがなかった。

けど、天城はとにかく惚れっぽいんだ。天城自身はなかなか純粹で、日ごろ変態発言を多々するわりには、恋愛に関しては夢見る乙女レベルの幻想を抱いている。

だが、告白、玉碎、告白までの間隔が短い為に、日ごろの言動とあいまって、ただの軽い奴として見られてしまう。

「教えてくださいよお、藤崎さん。やっぱりアレですか。彼女でもできたんですか？」

「ないないないない。シヨウに限って、それだけは絶対にない」

ちげえよ、と口を俺が開く前に、ゆかりが全力で否定した。

「おい、ゆかり。いくらなんでも、それは酷くないか？」

「じゃ、彼女できたことあんの？」

「……ねえよ」

それを言われると何もいえない。幼馴染って奴はそういうことまで詳細に知っているから困る。

「それに、シヨウに甲斐性なんてものはないから」

「あー、それはわかる。煮え切らないもんなあ。何にしても。きっと、女を連れ込んでそこから先までは絶対にいかないね」

ほっとけよ、と俺は思う。そんなことお前には関係ないだろう。

大体、お前は人のこと言えるほどのなのか。下ネタはOKでも、恋バナなんてしたらすぐに顔赤くするくせによ。彼女できたとしても、手を繋ぐ事すら抵抗感じそうだよな、テメエは。

「きつと、美少女に迫られたって逃げ出すよね。間違いない」

心臓が一瞬、強くはねた。あてずっぽうで適当に言っているのだろうが、俺の脳裏に今朝の光景が浮かぶ。

「おい、そこ。静かにしろ」

黒板の前に立つ教師が、俺たちに視線を向けていった。天城が「はい」と間延びした適当な言葉を返す。教師は一瞬顔をしかめたが、すぐに黒板に向き直った。

「大人の階段を上った感想は後でじっくり聞かせてもらうぜ」

つくづくこいつは馬鹿だよな。そんなこと、ねえってのに。

「だから言ってるじゃん。シヨウに限ってそんな勇氣あるわけないって」

ゆかりの口調は若干若干むきになっていった。全力で否定したいみたいだ。

確かに俺とお前は付き合いが長いよ。俺が彼女なんてできた事ないのも知っているだろうさ。でもよ、そこまで言わなくなっちゃったっていいだろう……実際その通りなんだけどさ。

などと考えていたら。



何かが破裂するような音共に、校舎が縦に強く揺れた。

「地震か!？」

誰かが叫んだ。だが揺れは一回、大きなものがあっただけだった。変わりに聞こえてくるのは発砲音。ついさっきまで平和だった校舎内に、サブマシンガンの渴いた音が鳴り響く。女子の、そう、多分中学三年生くらいの女子の声が反響する。

誰の仕業かは考えるまでもない。

頭痛がした。

## Case 5 超能力者、来訪する

ああ、俺は夢を見ているんだろうか。

「この、よくもー！」

レイラの叫び声が三階のこの教室まで聞こえてくる。

今は授業中のはずで、けれど多分、学校のほぼ全ての生徒が校庭へと視線を向けているだろう。教師がそれをとがめる事もない。生徒たちと同じように、窓の外に釘付けになっているはずだ。

教室の中の全員が窓際にへばりつくようにして校庭を見下ろしていた。俺はその最前列でその光景を目の当たりにしている。

「えー……マジかよ……」

天城がげんなりとした表情で呟いた。じんじられない、と言うように。俺も同じ気持ちだよ。多少お前らよりは状況がわかるけど、でもやっぱり、何かがおかしいと思う。

「あれ、何なの？」

ゆかりが指差した先には、巨大な大砲を抱えるソースケがいた。連続で引き金が引かれ、数発のミサイルが飛んでいく。

その横ではレイラがコンパクトを構え、そしてそのコンパクトからビームを発射していた。

目標は校庭に突っ立っている三人。直撃すれば恐らく即死であろうその攻撃を、二人の未来人は躊躇いもなくぶっ放した。

おいおい、あいつら冗談だろ？

しかし攻撃は真っ直ぐに目標に向かっていく。

直撃。轟音。振動。校庭に土煙が舞い上がった。教室にざわめきが走る。

「おい、なんだよあれ」「テレビ撮影？」「バカ、そんなのあるわけないだろ」「だったらなんだよ」「イタズラなんじゃないの？」「

「火薬つかったのかなあ」「アレなんだよ。ロケットランチャーか？」「あれで人、生きてるのかよ」「あの女、うちの制服着てるぞ」

頭が痛い。訳がわからない。

いきなりやって来たかと思っただら、散々引つ掻き回してどっかに消えて。帰ってきたと思っただら校庭でドンパチやらかして。しかも、殺人まで……

「おい、あれ見ろよ！」

クラスの誰かが叫んだ。その声に反応して、教室中の一箇所に眼差しが向けられる。

空中に三人の人間が浮かんでいた。

え？

「人が、飛んでる？」

ゆかりが眉をひそめながら言う。その言葉を口にしたのは、誰かに否定してもらいたかったからだろうか。

だが、誰も否定できない。人は確かにそこに浮いている。

三人は競泳水着みたいなスーツを全身に纏っている。赤みの掛かった髪と薄い茶色の男が二人、金髪の女が一人。遠目からでも、顔立ちから何から、日本人ではないのがわかる。

それにしても、なんて格好なんだろう。身体にフィットしすぎている。黒と灰色の配色が入り混じったスーツは、正直まともな奴が着るものとは思えない。コスプレか何かなのだろうか。

いや、そもそもなんで、どうやってあいつらは宙に浮いているんだ？ まさか、またあの未来人たちの関係者なのか？

その間にも、レイラとソースケが一斉射撃を行っている。無数のビームが三人に向かい、鉛の雨が重力に逆らって襲い掛かる。

だが、三人は何をするわけでもなく、ただそこにいた。ビームや鉛球が自ら避けていくのだ。

未来じゃ普通なんだよ、超能力者。

レイラの言っていたことが思い出される。そういうことなのか？

また、お前らの関係者なのか？

「勘弁してくれ……」

もつうんざりだ。俺はもう、あいつらと関わりあいたくない。

そもそも、俺が独裁者だと？ 俺は親父や教師をあいてにですら反抗した事がないんだぞ？ その俺が、そんな俺が、どうして独裁者なんだよ。

三人の内の一人、赤みを帯びた髪の方が地面へ降下した。同時に、金髪の女と茶色い髪の男がどこかへ飛んでいく。

レイラとソースケがその二人に向かって引き金を引いた。しかしそれらは目標に命中する事はなく、自ら不自然に上空へと逸れていく。

二人は難なく攻撃をかわし、何処かへ消えていった。屋上の方に向かったみたいだが、ここからじゃ正確な位置はわからない。

「なあ、もしかして、学校の中に入ってきたのかな」

天城がそう言った直後、放送のチャイムがスピーカーから鳴り響いた。

「早川さんがいらつしやいました。早川さんがいらつしやいました」  
若干震えた声のその放送は、学校に誰かは侵入したことを意味している。

学校で決められている、不審者が侵入したときの為の暗号的な放送。学生なら殆どが知っている。

「早川さんって、空を飛んでたあいつらのことだよな」「本当に飛んでたの？」「全部、作り物なんじゃねーの？」「よくできたグラフィックとか」「何のためにそんな事するんだよ」「だってビームとかなんてありえないし」「空飛べるわけないし」「でも、現に飛んでたけど」「ありえない」「夢じゃないよな」「集団幻覚？」

「みんな、とりあえず落ち着け！」

ざわめく教室を、教師が一括した。しかしその声は震えている。動揺しているのが丸わかりだ。

窓の外では、レイラとソースケが一人残った男に対して銃撃を浴びせていた。しかし男はその全てを弾き飛ばしている。超能力者だとするのなら、恐らくサイコキネシスと言っやつだろう。

外人の男は無言のまま二人に歩み寄る。手ぶらだ。その手を二人

に向けて翳した。

そして瞬間、レイラの身体が吹っ飛んだ。ソースケは重火器の重みと踏ん張りでなんとか耐えたようだが、直後に一瞬で接近してきた男に顔を蹴り飛ばされた。

ほぼ同時に、悲鳴が校舎の中に響いた。この階の一番端の教室からだ。

理由はすぐにわかった。やつらが、教室の扉を弾き飛ばしたからだ。「藤崎正太郎はここだな？」

金髪の女の方が言った。日本語だ。その口調は厳しい。

教室に二つの意味でどよめきが走る。金髪でボデイライン丸見えのスーツを着た不審者がやってきたのだ。不審者かつ、金髪コスプレ外人。なんだこれは。

「オイオイ、ステラ。皆さん怖がっているじゃないか。少しは事情を説明したらどうだい？」

隣に立つ茶色い髪の男は、外国人とは思えないほど、流暢で軽快に、明るく日本語を話している。そいつの服もボデイラインを強調している。一部、もっこりしている場所があるが、つつこんではない。

「黙れ。お前の力を使えばどれが目標なのかわかるだろう。早く教えろ」

「ステラ、君は何度言ったら」

「早く教えろといっている」

金髪の外人ねーちゃんが茶色が見の男に詰め寄った。喧嘩かよ。

なら、どこか他所でやってくれ。

「ソー、そんなに起こるなって。可愛い顔が台無しじゃない。君もそう思うだろ？藤崎正太郎」

まただ。また、俺の名前を呼びやがった。あいつらは一体

「何者なんだろうか。ってね」

茶色髪の男が、突然俺に向かってウインクをしてくる。いや、それよりも今あいつ、俺が思っていたことの続きを口に出しやがった

ぞ？超能力つてまさか、そんな。

「そのまさかだったりするかもね」

茶色髪が寄ってくる。金髪の、ステラと呼ばれた女性も一緒に。生徒が散り散りになる。俺は動けなかった。身体が動かせなかった。まるで、何かに押さえつけられているかのよう。

「君が特異点かあ。そんな風には見えないけどね」

「何でもいい。サミュエル、さっさとこいつを回収しろ。撤退するぞ。あまり目立ちすぎても仕方がない」

茶髪の男の手が俺へと伸びてくる。さっきから何言ってるんだよ。特異点つて、あの、レイラが言っていたアレのことか？歴史の決定事項つて奴。それに、回収？俺をか？一体、どこに連れて行くつもりだよ。

逃げようとしたが、身体は動かない。瞬きすらできなかった。金縛りにあっているかのようだ。

ヤバイ。なんだこれ。超能力つて奴か？そしたら俺、つかまるしかないんじゃないか。

「シヨウウから離れる！」

俺と外人たちの間を、何か黒いものが通り抜けていった。それを目で追う。ああ、クナイか。なるほどね……は？クナイ？

えっ？



痛てえ。骨が折れるかと思った。しかも地面に頭ぶつけるし。た  
んこぶできたし。スリーサイズどころでの話じゃねえ。

何時の間にか、身体は動くようになっていた。さっきまでのあれ  
はなんだったんだ？

「ねえ、何考えてんの？信じらんない！女子高生のトップシークレ  
ットをばらすなんて！」

「秘密にするほどもないだろうが……」

「何が!？」

「いえ、何も」

やっぱり、こいつはゆかりだった。

口元を隠しているが、明らかにゆかりだ。十年以上も付き合っ  
ているんだ。口元が隠れたってわかつちまう。

ゆかりは忍び装束を着ていた。写真とか漫画とか、そんなとこで  
しか見たことのないやつだ。なんでお前そんなもの持つてるんだよ。  
制服はどこへやったんだよ。その前に、いつ着替えたんだ？

「てかさ、なんだよござるって。無理ありすぎるだろ」

「わ、私だって嫌だったんだよっ？だって、父さんがそうしろって  
いうから……」

その割には楽しそうに喋ってたなあ、オイ。

「あのね、今まで黙ってたけど、私達月島家は、忍者の家系だった  
んだ。先祖代々、藤崎家を守る事がが使命なの」

「だからお前も俺を守ってくれたって言うのか？」

「うん。なんかシヨウ、物凄く物分りがいいね」

そりゃあな、変人奇人共がこれだけ出てくれば、さすがに耐性だ  
ってつくってもんだ。

「見つけた！そこだね、ハットリボーイ……アレ、これはくノ一ガ  
ールか？ま、どっちでもいいさ！サインくださいさーい！」

サミュエルとかいうのが俺たちを追って走ってきた。こいつもこ  
いつで超楽しそうだな。目を輝かせて。息を切らせて。馬鹿か？こ  
いつ？



「いい加減にしろ、サミュエル。私達の目的は特異点の捕獲だ」

茶髪から僅かに遅れて、金髪の姉ちゃんがやってきた。

強調されているボディラインにどうしても目が行ってしまう。なかなかいいスタイルをしているな。出る所は出でて、締まるところは締まっている。レイラはまだ中学生と言っただけあって童顔だが、こっちは大人っぽい。これはこれで、ありだな。

「む……なんだ、藤崎正太郎」

「シヨウ、さつきからどこみてんの？」

それにくらべて、ゆかりときたら。残念ボディにもほどがある。

「今鼻で笑った！笑ったでしょ！」

「あー、くノーガール。そろそろ本題に入らせてもらおうよ」

咳払いをしつつ、茶髪のサミュエルが言った。

「藤崎正太郎。君には不思議な力が働いている。あらゆるものが君にひきつけられていると言えればいいのかな。君のその身体を調べさせて欲しい。素直に俺たちに応じてくれれば、野蛮な事はしない。多分」

「多分？多分ってなんだよ」

「いや、こっちの女性の血の気が盛んというかなんとか……」

「どっちでもいいよ、そんなの！シヨウは渡さないから。シヨウはアタシの玩具だからね？」

あっはっは。何を言ってくれているんだゆかりさんは。俺は君の所有物になった覚えはありませんよ。

懐から取り出したクナイを構え、ゆかりは俺と外人二人の間に入る。ちよつと待て。なんだこのムードは。

「そうか。それならば仕方あるまい」

ステラと言う金髪ねーちゃんが手の平をこちらへ向けた。その顔は楽しそうに笑っている。闘える事が嬉しいというように。

そして。

「きゃっ！」

ゆかりの身体が吹っ飛んだ。突然、前触れもなく。

「ゆかり！」

超能力、なのか？

そういうこと。だから俺たちには絶対敵わない。OK？

頭の中でサミュエルの声がした。これは、テレパシーってやつか。

ステラはサイコキネシスが使える。俺が使えるのも、テレパシーだけじゃない。大人しくしていた方が身のためだぜ。あのくノ一ガールにもそう言っておいてくれよ。

「もう、何なのこれ。父さん、私聞いてないよ！」

ゆかりが駆け足で戻ってくる。もう復活したみたいだ。こいつ、意外とタフだな。

「おい、ゆかり。そいつら超能力使えるってよ」

一応、言ってみる。でも俺は知ってるんだ。ゆかりはこういつたって聞かないってことは。

「うっさい！父さんから受け継いだ月島流が、そんなアホみたなものに負けるわけない！」

ゆかりは自分の家の武術に絶対の自信を持っている。世界最強を信じて疑わないくらいに。

忍者の家系とか馬鹿らしいと思うが、それだけはよく知っている。だから引くわけがない。自分が負けるということが、どうしても許せないタチなんだ。

「アホだって？くノ一ガール、今君は、世界中の超能力者を敵に回したよ」

「世界中にそんなに超能力者がいるわけねーだろ」

いたらいらたで怖い。

シャラップ、特異点。君の頭の中でアルミホイルを噛み潰す音を延々と流し続けるぞ。

止めてください。お願いします。

わかればいいよ、わかれば。

クソ、こんなしょうもない脅しにテレパシーなんか使うんじゃない

えよ……

「そういうわけなんだ。ごめんよ、くノーガール」

「御託はもういい。始めるぞ」

ステラが廊下を駆け、ゆかりへと詰め寄った。手の平を翳し、目に見えない力でゆかりを吹っ飛ばそうとする。やっぱり、超能力。だがそれよりも驚くべきなのは。

「な、早い!？」

ステラが驚愕の声を上げる。俺だって驚いた。ゆかりが突然に消えたのだ。

「遅いよ」

ステラの背後へと突如現れたゆかりは、そのまま手刀を首元に打ち据える。まさに早業、目にも留まらぬ速度だった。

「まさ……か……」

ステラが気を失い、廊下へ倒れていく。

「ステラ!」

サミュエルが叫ぶ。それに反応してか、ステラが目を見開き、地面に衝突する寸前の所で持ち直した。超能力か何かをつかったのだろうか。

「すまない、助かった」

「あのくノーガール、伊達じゃないぞ」

「ああ、わかつている。油断しただけだ」

サミュエルがステラの肩を抱いている。やばい、これ、あいつらを本気にさせちまったんじゃないのか？

などと考えている内に、俺はゆかりに抱きかかえられていた。

俺が全力で走っても追いつかないようなスピードでゆかりは廊下を駆けていく。その顔は真剣そのものだった。

「逃げるが勝ちだよ、シヨウ。あいつらに捕まったら、何をされるかわからない」

「……お前、何か知っているのか？」

「うん。まあ、一応ね。あいつらの言っている意味も大体わかる。

まさか超能力者だとは思わなかったけど。とにかく、シヨウをあい

つらに渡すわけにはいかない。仲間のとこまで、一気に案内するから」

仲間？仲間だって？これ以上変な奴が出てくるのかよ。

というかこの状況。くノ一にお姫様抱っこをされながら逃げているって、相当恥ずかしいな。

などと考えていたら、突然、ゆかりがその足を止めた。慣性力よろしく、俺の身体が前にもっていかれそうになる。

「おい、どうしたんだよ一体」

「敵だ。あいつ、やばい」

ゆかりの声を聞き、前へ視線をむける。

そこには見るからに筋肉質な、というかありえないほどに筋肉隆々とした男がいた。

## Case 7 筋肉、パンプアップする

二メートル以上の背丈。常人の頭の幅程度はあろうかというほど盛り上がった二の腕。足は常人の胴体と同じくらいに太い。なんだこれ、人間じゃねえ。

「よう。お前が藤崎正太郎だな？」

クソ、またこの手合いか。いったいいつまで続くんだ。

タンクトップにジーパンを半ズボンになるように改造したやつを着ている。全部、特注品なんだろうな。市販のやつだと腕が入らないだろうし。

「俺と闘え。さあ！」

筋肉隆々なその男は、俺を指差してそんな事を言う。

え、ちよつとやめてくださいよ。そんな事したら俺、死んでしまいますが。

「ちよつとは待ってくれよな、くノ一ガール」

後方には突如さっきの外人コンビが現れていた。あれはテレポーターというやつか。

やばい。挟まれた。逃げ場がない。

「貴様は、タカツキ！？なぜこんな所に！？」

ステラが叫んだ。どうやら筋肉とこいつらは知り合いらしい。

「何、ちよつと特異点の実力を確かめようと思っただけ。歴史に選ばれた男なのだろう？それならば強いはずだ。俺は強い相手を求めている！この筋肉が満足する相手を！」

何いってんだ、こいつ。あたまおかしいのか？脳ではなくて、筋肉で考えてんのか？

「よくわからないが……まあいい。月島流とかいったな、女。貴様がいかに狭い視野で物事を判断しているか、教えてやる」

ステラが口を開く。ちよつとやめて。そんなこと言ったら、ゆかりさんキレちゃうじゃないっすか！

「ごめん、シヨウ。ちよつと降りて」

「え、ちよつとゆかりさん？」

「わたし、きみならひとりでもあのまっちょなひとにかてるとおも  
うな」

「某読みつすよ。やめてくださいよお、ゆかりさん！」

情けない事だが、ゆかりから離れて生き残れる自身がなかった。  
だつてほら。目の前に筋肉が見るからに筋肉が全てなの方が。

「さっきの続きをやるぞ、女」

「くノ一ガール、もう負けはしないよ」

「望む所！月島流は最強だから！」

背後で完全に乗せられたゆかりと外人たちが人外バトルを始める  
と同時に、奴が走ってくる。

「さあ、始めるぞ。構えろ、特異点。高槻力、我が筋肉を見せ付け  
る！！」

「くんなよおおおおお！」

「つか、力りきつて。名前まで筋肉に支配されてやがる。

迫る筋肉。頭を掴まれたら、卵のように簡単に握りつぶされそう  
な手。やべえ。終わった。これは、死ぬる。

そう思ったその時。

「しょうたるー！！！！」

どこかで聞いた声と共に、筋肉を極太ビームが直撃した。  
「ふべらっ！」

訳のわからん叫び声と共に、筋肉が光に消えていく。こんな事を  
するのは決まっている。あいつだ。

「いやー、危ない所だったね、正太郎」

ボロボロになった制服を着た女。自称未来人、十五歳。巨乳で童  
顔。レイラ。

その手に持っているのはコンパクト。ただのコンパクトではなく、  
未来の万能ツール、できる君。

くそ、ただの電波だと馬鹿にしていたのに、こんなのに命を救わ

れるなんて。

窓の外では交戦状態が続いている。

今、ソースケが両肩に構えたロケットランチャーを連射した。ロケラン二台つて。連射つて。やっぱりそれも、未来の兵器なのか？ その弾道は空中で停止し、爆発した。恐らく、中に浮いている赤い毛の男の仕業だ。あいつも超能力者なんだ。つーかもう、宙に浮いている時点でなんでもありだが。

未だに校舎の中には生徒がいる。この近くにだつて、まだ。逃げられないんだ。人外連中が校庭を制圧し、廊下で暴れ、逃げたくても逃げれない。

しかもその原因が俺だというのだから、辛い。

俺が何をした？何もしてないだろ？ふざけんなよ、神様！

だから、俺たちと一緒に来ればすぐ終わるつて。

「うつせえ、外人！頭の中に語り掛けんな！」

おお、怖い怖い。

外人達はというと、ゆかりと戦闘中だった。

ゆかりの武器はクナイと手裏剣。そして鎖鎌。なんて忍者らしい戦い方なんだ。

「喰らえ、女ア！」

「だから遅いつて言つてんのよ！」

超能力で校舎を瞬く間に破壊してく金髪外人ねーちゃん。認識不能な速さで廊下を駆け巡るくノ一。そして、俺にひたすら嫌がらせをしてくる茶髪外人。

嫌がらせとはずいぶんだね。

お前はなんなんだ。暇なのか？だったら帰つてくれよ。

これも作戦のうちだね。どうする？これから「しりとり」でもするかい？日本の遊び、勉強したんだぜ。

こいつは無視することにした。何を考えているかまるだわからない。

ひどくね？

「正太郎、今の内に逃げよう」

レイラが俺の手を引く。けど、できない。そんな、ゆかりを置いていくなんて。

「待てよ。だったら、あいつも一緒に」

「あいつ？あの忍者？そんなのどうでもいいよ。早く逃げないと、どうしようもないことに」

「どうでもよくななかねえよ！大事なダチだ。ほおってなんかおけるか！」

昔からゆかりとはよく遊んでいた。馬鹿なことをたくさんやって、楽しく笑いあつて。冗談を言い合いまくって。理解できないこの状況だとしても、ゆかりを見捨てるなんて駄目だ。

「けどっ！」

「復ツ活ウ！！」

なんか、野太い雄叫びが聞こえてくる。いやだなあ、気のせいだといいんだけどなあ。

ビームに消し飛ばされたはずの高槻力が、教室の中から廊下へその巨体を現した。こいつ、死んでなかったのか。

「ほら、正太郎が早く逃げないから、こいつ起きちゃったじゃん！」「うるせえ！それより、お前もこいつを知ってるのか？」

筋肉野郎は一人で勝手に高笑いをしている。こいつは馬鹿だ。それは確実だな。

「……あれは、戦後の富豪、早瀬醍貴が開発した、人体強化の遺伝子コードを組み込んで生み出された実験サンプル。試験管で生まれたあいつは、遺伝子コードの力で人間よりも強く育った。その結果が、アレ」

まで。今、こいつは何を言ったんだ？さっぱりわからん。

「おい、そのビキニ。お前は俺様のことを知っているのか？世界で最も筋肉に愛された男、高槻力のことを」

「知ってるよ。あなたのは未来でも有名だからね」

「そうか、未来でもか。そうだろうな。真の強者は古今東西未来永



劫語り継がれるものだ！」

「……そして、類を見ない脳筋であることもね」

そこだけは高槻力に聞こえないように、小声で呟いていた。何を言っているのか、俺にはさっぱりだぞ。

要するにそいつは、実験で生まれた筋肉モンスターってことさ。わかりやすいだろ？

ああ、なるほど。いきなり理解できたぞ。なんでだろう。不思議だなあ。

ここまでシカトされると俺、悲しいね。

「ともかく、あいつはヤバイの。戦わない方がいい。四の五の言っ  
てないで、逃げたほうがいいの！」

「うっせ、しるか！そんなの、お前らの都合じゃねえか！」  
「たく、さつきからこいつらはなんなんだ？」

自分たちの目的の為にこんな事をして。全部俺を中心に回ってる  
みたいだが、俺の思惑なんて完全に無視だ。腹が立つ。

「ようやくやる気になったか、特異点！」

俺の背後に筋肉モンスターが立っていた。

「こいつ！」

レイラができる君から数発のビームを発射する。  
しかし。

「ふん！」

そいつは衝撃波を出した。原理はわからん。ともかく、俺の身体  
が吹っ飛ばされる。

そして、信じがたいものを俺は見た。筋肉野郎は光であるビーム  
を弾いてしまったのだ。

同時にタンクトップがはち切れていた。筋肉がよりいつそう盛り  
上がっている。ここまで筋肉質だと、気持ち悪い。

「そ、そんな……」

レイラが唾然としている。俺だってそうだ。狂っているとしか思  
えない。ビームって工学兵器だろ？ミサイルとかとはわけが違うん

だ。どうやって弾いたって言うんだよ。

タカツキは今、筋肉を急速にパンプアップさせることによって彼の周囲の空気を弾き飛ばし、真空にしたんだ。そして、その空気は周りの空気にぶつかり、凝縮。屈折率が変化したんだよ。そしてビームの入射角が臨界角となり、光は弾かれた。

わざわざ解説ありがとう。サミュエル。

いやいや、礼には及ばないよ。俺も暇だしね。

こいつ、自分で暇って言いやがった。

それにしてもだ。この高槻力とかいう筋肉の怪物は恐ろしすぎる。マジで死ぬる。

「さあ、始めるぞ特異点。俺とお前、どっちが上か、白黒はつきりつけようじゃないか！」

いや、もう結果は見えてるんですよ？

だから止めてくださいって、そんな手を近づけないで。

「俺のダチに……」

遠くから、どこか聞き覚えのある声が響いてきた。

こういう時に駆けつける、熱血馬鹿。自分の気に入らないことが許せないあいつ。初心なのに女好きと思われるあの野郎。

なんで、あいつが。

「天城、なんで来たんだよ！」

そう言いながら振り向く。

「天……城……？」

けど、そこにいるのはいつもの天城じゃなかった。

「なにしてんだあああああああ！！」

下半身に生服を着た、上半身裸の犬の顔をした男。全身に黒い毛で覆われている。尻尾も生えていた。手の爪は鍵づめのようになっている、二足で廊下を爆走するそいつが、筋肉野郎に向かってとび蹴りをかました。

何をしても動かなさそうだったその巨体が、僅かに吹っ飛んで倒れる。

「大丈夫か、藤崎っ！」

暑苦しいこの声。間違いない。この犬みたいな男は天城だ。こいつも変人奇人共の一員だったと言っわけだ。なんてこった。

## Case 8 悪魔、魔力開放する

「お前、その格好一体どうしたんだよ……」

一応、聞いておく。どうせとんでもない回答が帰ってくるんだらうけどな。

一体次は何だ？人体実験の弊害か？俺、実は狼男だったんだ、なのか？

「ん、ああ、これが。俺って実はな、悪魔と人間のハーフだったんだ」

おっと、これは予想の斜め上を突き抜けてくれましたね。藤崎さん思いもせませんでしたよ。

「俺の父ちゃんってのがケルベロスなんだけどよ、あ、ちなみにケルベロスってあの三つ首の地獄の番犬ね。その父ちゃんがさ、ある日気まぐれで人間界にやってきたの。人間の姿に変化して。そんで、俺の母ちゃんに一目ぼれして、そのまま結婚。信じられる？どこのヤンキーかつつう話だよな。しかもさ、父ちゃんさ、地獄の番犬と一家庭の亭主掛け持ちしてんの。毎日必ず晩飯は食いに帰ってくるんだぜ」

「ごめん、天城。俺、お前が何を言っているかよくわからない」

大概の事には驚かないつもりでいたが、悪魔って。人間とのハーフって。さすがにビックリだわ。許容範囲超えてるわ。

「貴様……この俺が耐え切れない攻撃を繰出すとは、何者だ？」

ゆらりと高槻が起き上がる。二メートルもの巨体は、この学校には大きすぎる。筋肉野郎はわざわざ猫背にしていると云うのに、頭は天井スレスレの位置にある。少しでも跳ねたら、頭を打つ事は確実だ。

「ケルベロスの息子。天城<sup>あまぎがし</sup>効。こいよ、アンタ。ダチをやった代償は高くつくぜ？」

「何挑発してんだよ。天城、逃げる。こいつはヤバイから」

「大丈夫大丈夫。俺、最強だぶらっ！」

余裕をぶっこく天城の顔面を、巨大な拳が捉えた。

「天城……イーイ！」

ゴルフボールみたい在天城の身体が吹っ飛んでいく。ちなみにゆかりとステラは全くそれに気がついていない。二人の世界にはいつてしまっている。サミュエルは半分笑い状態だった。

なんてやつだ。この筋肉。

「邪魔が入ったな、特異点。さあ、続きをやるぞ！」

「ほら、だから逃げようって言ったのにー！」

俺だって、ちよつとそんな気がしてきたさ。

天城の尊い犠牲のお陰でやつと気づいた。ごめんよ、天城。俺がもつと早く決断していれば、あんな事にはならず済んだのに。

「いやあ、効いた効いた。ごめんよ、オッサン。俺、アンタの事ちよつと見くびってたわ」

あ、生きてた。

よろよろと片足を引きずりながら天城が帰ってきた。それにしてもボロボロだな。今の一撃でだよな？

「ほう、俺が一発殴って死ななかつたのは、七十三人ぶりだぞ」

……こいつ、普段どこで何してるんだ？てか、俺も危うくその力ウント進めそうだったよな？

「ま、こちらら悪魔の血が入ってるんでね。こんなので死んだら、地獄の父ちゃんに合わせる顔がないんだよ」

天城、なんかカツコいいこと言っているが、お前は大丈夫なのか？素直に逃げた方がいいんじゃないのか？こいつ、誰も勝てないぞ。レイラが俺の袖を引いていた。逃げよう、というアピールだ。俺だってそうしたくなってきた。あつちで人外バトルを繰り広げているゆかりなら、こいつからも頑張って逃げ切れそうだし。でも、今そんなことしたらこの脳筋が地の果てまで追っつきそうで、怖い。

「オッサン。俺の本気、見せてやるよ」

「ほう、それは楽しみだ」

天城は一言、いくぜ、と呟き、その右手に刻まれた紋章を掲げた。  
「魔力、開放!!」

天城の右手の紋章から、黒いオーラが流れ出た。それは次第に天城を包み込んでいく。天城の目の色が赤いものへと変わる。

全身の怪我也もみるみるうちに治っていく。ほう、さすが魔力開放しただけあるな。素人目にもわかりやすいすごさだ。

両手の爪が伸び、歯が尖り、さらに獣っぽくなっていく。

「ほう……俺の僧帽筋そうぼうきんが高ぶっているッ……」

僧帽筋つてどこだよ。そんな筋肉、初めて聞いた。

「待たせたな、オツサン。これが俺の本気だよ。きやがれ。ぶちのめしてやるぜ」

「そうだな。まずは特異点の前に、貴様を我が筋肉の餌食にしてやるっ！」

悪魔と筋肉オバケがバトルを開始した。もう、なんなんだよ、この空間。

高槻がその巨体からは想像もつかない素早さで拳を連発するのに対し、天城は真っ黒いオーラを纏った手で、その全てを受け止めていた。そのたびに衝撃波によって周囲の窓が割れ、蛍光灯が割れ、さらには教室のドアが真っ二つに裂ける。

もう一方の戦いと言えば、なんかステラはサイコネシスだけじゃなくて火炎放射やビームまで撃ち始める始末だし、ゆかりはゆかりで、なんかどす黒い雰囲気纏った刀を手に握っている。今、その刀で炎を切った。炎を切るって、どんな刀だ。妖刀か？妖刀なんだな？

今度は高槻が攻撃に転じていた。どこからともなく取り出した拳銃を振りかざし、それを筋肉野郎にむけて連射している。筋肉野郎はそれを反射的にほぼ受け止め、そうできなかったものは筋肉を硬化させることで防御していた……もう、勝手にしやがれ。

「さあ、正太郎。今の内に」

「ああ……俺、もう疲れたよ……」

何かもう駄目だ。つつこむ気すら起きなくなってくる。精神の限界だ。やるせなさまでこみ上げてきた。

そんな俺の疲弊しきった精神を読み取れるくせに、テレパスのクソ野郎ってやつは。

「君、ちよつとごめんよ」

サミュエルが俺の目の前にテレポーターションして現れる。虚を突かれたレイラをどかし、俺の手を握る。

それじゃ、俺たちと来てもらうよ。

「え、ちよつと待っ」

意識が捻じ曲がる感覚が俺を襲う。

## Case 9 サイボーグ、突破する

「て、うわっ!」

気がつくのと、俺は校舎の上空にいた。思わずサミュエルに抱きついてしまう。やべえ、怖い。何これ、超高いよ。しかも、なんか浮いてるし。

しかも、隣にはソースケと交戦中だった赤毛の超能力者が。

「遅かったな、サミュエル。それが特異点か?」

赤毛の男が口を開く。映画俳優みたいな人だな。素直にカッコいいと思う。なんでこんな人まで、変人達の仲間なんだ……

「すまないね、ヨハン。ちよつと邪魔が入つて。ともかくこれで、ミッシェンコンプリートだ。それにしても藤崎、君は距離が近いな。俺にそつちの趣味はないんだがね」

「俺にだって」

ねえよ、と言おうとした瞬間、俺の髪の毛を何かが掠めた。

「今のは少し危つたか」

ヨハン、という赤毛の超能力者が呟く。危ない? 一体何のことだ? 直後、爆発音が上空で鳴り響く。まさか、俺の髪を掠つたのって。「ミサイルだろうね。でもまあ、当たらなかつたから結果オーライなんじゃないか?」

校庭で何か見たことのない物騒な武器を構えているソースケの姿が見えた。というか、あいつ自身が持っているだけじゃなくて、校庭にこれでもかとミサイルやビーム砲台がセットされていた。

あいつ、まさかアレを打つ気か!?

「おーい! ちよつと待てーえ! 俺もここにいるぞーお!」

あんなのを撃たれたらたまつたもんじゃない。絶対に死ぬ。やばすぎるだろ。

しかし、ソースケの様子は変わらない。というかむしろ、笑つた



ように見えたのは俺の気のせいかな？

「あいつ、偶然を装って君を撃ち殺せるって喜んでるよ」

ソースケの心を読んだのだろう、サミュエルがそう教えてくれる。  
あの野郎。

「もう駄目だ！殺される！死ぬ！終わった！」

「落ち着けよ、ブラザー。ヨハンなら大丈夫さ」

サミュエルが俺にむかって満面の笑みを向けてきた。サムズアツプまでしていやがる。

いや、でもですね。ミサイルがですね。レーザーがですね。

それから数秒後、大量のミサイルとビームが俺たち目がけて発射された。全部喰らったら、肉片一つ残らなさそうな数だ。

ミサイルが噴出す煙と、ビームの光と、弾頭が俺たちの視界を埋め尽くしている。

終わった。

それらは俺たちに到達する前に爆発。そしてビームは俺達から僅かにそれていく。

これも超能力か？

「そう。ヨハンは俺たちの中で最も強いサイコネシスを扱う事ができる。さっきの筋肉馬鹿みたいに、真空を作って屈折率を変えることだって可能だ。ミサイル自身はちょっと中身をいじってやれば爆発するし、誘爆だってする。俺ほどではないが、テレパスでもある。ま、ヨハンにとっては何の問題もないね」

わざわざサミュエルが解説してくれる。なんかこいつ、こんなこと喋ってばかりでいいのかなあ。やっぱり、暇なのかなあ。

「ステラはまだか？目標を捕獲したんだ。さっさと撤退するぞ」

おい、何か俺、このまま連れてかれる流れじゃないか。「冗談じゃない。ふざけんなって。」

「俺もそうしたいんだけどね。なんか、スイッチが入ったみたいだ」  
「またか。いい加減、あの癖はどうにかならないのか？」

「俺にはどうもできないね。まあ、そのうち来るだろ。って、ヨ

ハン、上だ！」

サミュエルが突然に叫びだす。ヨハンと俺が一齐に上空へ視線を向けた。

そこには、背中から鋼鉄の翼を生やし、足の裏からジェットを噴射するソースケの姿が。

「もらった」

ソースケは左の手の平に設置されている銃口からビームを発射する。ヨハンが周囲に真空の空間を作り出し、それを屈折させた。その間にソースケは真空の空間を避けて飛行し、俺らの前に現れる。

「死ね」

ソースケの右腕が高速で機械的に変形していく。一秒も立たない間にソースケの右手はビームの刃を形成する装置に変換さる。そしてそのビームの刃をヨハンに向けて振るった。

直撃すると思われたその瞬間、ソースケの動きが止まった。おそらく、サイコネシスかなんかで壁をつくったのだろう。しかしそれは僅かな間しか持たなかった。ソースケの身体から機械の駆動音が鳴り響き、超能力の壁を切り裂いていく。

ソースケが動きを止めたその一瞬に空を飛行し距離をとっていたヨハンは、そのままソースケの背後に回った。再び手を翳し、ソースケの身体を吹っ飛ばす。

が、同時にソースケは左手のレーザーをヨハンに向けて放っていた。攻撃と同時に放たれたせいかわ、避け切れなかったみたいで、わき腹にそれが掠った。

「外したか」

そう言いながらソースケが態勢を立て直す。ヨハンのわき腹からは血が流れ出ていた。

「お前、アンドロイドだったのか」

ヨハンのスーツは僅かに焼ききれている。レーザーにやられたんだ。そこから滲む血が、地面へ少しずつ垂れていく。

「サイボーグだ。奥の手は最後までとっておくものだろう？」

いやはや、ちょっと人の道を外れているとは思っていたが、まさか本当に人間じゃないなんて。サイボーグって、おい。

ソースケが背中と足のジェットを噴射した。大きく空へ舞い上がり、旋回しつつ、レーザーを連射する。光速で突き進むそれを、ヨハンは紙一重で回避していた。心が読めるからなのだろう。

ヨハンの放つサイコネシスをソースケは機動力で避けていく。心を読みながらも、ヨハンはそれに対応できていないみたいだ。

それにしても、映画じゃあるまいし、なんでこんな空中戦が繰り広げられているんですかね。ハリウッドも真っ青ですよ。

かんべんしてくれ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0544ba/>

---

独裁者(予定)と、とってもカオスな野郎共

2012年1月3日00時51分発行